

□ 次の①～⑧の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- | | |
|-----------------------------|----------------------------------|
| ① <u>収益</u> を計算する。 | ② <u>防災訓練</u> を行う。 |
| ③ <u>在宅</u> で働く。 | ④ <u>大陸</u> から <u>黄砂</u> が飛んで来る。 |
| ⑤ <u>博物館</u> <u>ヒゾウ</u> の品。 | ⑥ <u>キヌイト</u> の生産で有名な町だ。 |
| ⑦ <u>カンイ</u> な包装で済ませる。 | ⑧ <u>不正なミツヤク</u> があつたらしい。 |

□ 1～2のそれぞれの問いに答えなさい。

1 次の漢字の総画数を算用数字で答えなさい。

- ① 夢 ② 底 ③ 卷 ④ 誤

2 漢字の読みには音と訓があります。次の①～④の熟語の読みは、どの組み合わせになっていますか。ア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 小 銭 ② 手 本 ③ 内 部 ④ 毎 朝

ア 音と音 イ 訓と訓 ウ 音と訓 エ 訓と音

③ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

(特に指示がない場合、句読点や記号は一字に数えます)

「ぼく」と「栗田」は、学校で危険な遊びをしていた罰として「おやじ先生」の手伝いをさせられている。

「よお、二人とも、やってるな」

おやじ先生は、ときどき、ぼくらの①働きぶりを見にやつてきて、なにかしら声をかけていく。きびしい午後のひざしをあびて、だらだらと汗を流していると、「ないしょだぞ」なんていいながら、ジュースやアイスをおごってくれる。

「おまえら、あんがいまじめだもんな。成績のほうはイマイチだけど、こうして見てると、なかなかいいぞ。まるきり捨てたもんじゃない」

そう先生がいうように、栗田もぼくも、よく働いた。「三日ボーズ」の期間がすぎても一日だって休まなかったし、一分たりとも遅刻しないで、早めの時間に仕事についた。むこうはどうだか知らないけれど、ぼくは、②死んでも栗田のやつに差をつけられたくない、と思った。それで、自然とそうなった。ぼくらは、毎朝、プールの前で「おう」とか「やあ」とかあいさつをして、別れるときに「じゃあね」というまで、ほとんど、なにもしゃべらない。たまに言葉をかけるとしたら、プールそうじに係のある「ブラシ、どこ？」だの「そっちは栗田にまかせるよ」だの、そんな感じで、おやじ先生と三人そろっておやつを食べたりするほかは、いつも別々に行動していて、お昼のときも離れて食べた。

四日めからは、③栗田のように、ぼくも一人でお昼を食べた。「ひまがあつたら、ちよくちよく来るね」と、はじめのころにはいつてたくせに、家族旅行だなんだといって、ともだちはみんな、ぼくを見捨てた(どうせ、こんなもんなんだよな、男どろしの友情なんて)。おまけに、家では、おかあさんがすっかり具合を悪くしていて、弁当なんて作ってもらえるようなムードじゃなかったから、仕方なく、ぼくは少ない予算で「買い弁」をすることになり、朝っぱらから近所のコンビニめぐりをしなくちゃならなくなった。

④一人で食べる弁当は、なんだか、すぐくまらなかった。

お腹は、とてもすいているのに、なにを食べてもおいしくなくて、病気で熱があるときみたいに、一滴もつばが出てこない。そのうえ、しゃべる相手がいらないハリアイのなさど心ぼそさで、気がつくとも、まるで別人みたいになさけない顔になっている。だいたい、ぼくは、一人でいるのが、あんまり得意なほうじゃあなくて、どこへ行くにもなにをするにも、にぎやかにしているのが好きだ。だから、仲間といるときは人の何倍もはしゃぐんだけど、そうでなくなると、とたんに気持ちが悪く、しぼんでしまう。

「そういう子のこと、ウチベンケイ科アミノジャク属っていうのよ」
小さいころ、おかあさんは、よく、ぼくを植物にたとえていった。

「ウチベンケイっていうのは、つまり、自分の家族や、おともだちには大いばりして、強がってるのに、よそでは静かになっちゃう子。アミノジャクは、またの名前をヘソマガリともいうのよね。人の話を素直に聞かない、困った子どものことなのよ」

小さなぼくがたずねると、おかあさんはこにこしながら、当然みたいに、こういった。

「※トオルはね、あなたと違って、手のかからない、いい⑤苗よ。いまに、りっぱな花を咲かせる、がつしりとした木になるはずよ」

「ぼくのは、花とか、咲かないの」

「咲かないことは、ないでしょう。もし、どうしても咲かせたいなら、いまよりもっと努力して、足りないところをおぎなうような、そういう工夫もしなくちゃね」

どうやら、ぼくは、おかあさんのたとえ話の世界でも、どうしようもない、できそこないの苗に見られていたらしい。おかあさんは、そんなぼくにもチャンスはあるからがんばって、といったつもりかもしれないけれど、⑥かえって、こっちは傷ついた。だいたい、りっぱな花を咲かせる努力をしたい、と思っても、努力の仕方を考えつくほど、ぼくの頭はさえてなかった。

そういうぼくに比べると、栗田は、よっぽどオトナというか、一人でいても、ぜんぜん平気でびびったりしない性格みたいだ。お昼を食べているときだって、さびしいとか、むなしいだとか、思い悩んでいるような様子はぜんぜん見あたらないし、食事をすませて、それでも、たっぷり時間が余っているときだって、のんびりと空をながめていたり、本を読んだりなんかしている(きつと、一人で山登りとか、一人で海外旅行とか、そういうとんでもないことだって、やろうと思えば、できちゃうタイプだ)。そうでなければ、通りすがりの生徒と声をかけあいながら、アハハと派手に笑ったりして、上手に退屈しのぎをしている。

「一匹オオカミなんだってなあ。カッコいいよな、オトコっぽくて」

おやじ先生も、どこからか、そんな話を聞いたらしくて、ぼくといるとき、遠くのほうの栗田を見やって、そういった。

「はあ、まあ、なんか、そうらしいっすね」

ぼくが、しぶしぶ認めると、

「おまえって顔に出るただよな。負けずぎらいの食わずぎらいだ」と、ぼくの心をみすかしたように、おやじ先生はにんまりとした。

※トオル：「ぼく」の兄。

(笹生陽子『ぼくらのサイテーの夏』より)

問一 ― 部①「働きぶり」とありますが、ぼくらは何をしているのですか。本文中から六字でぬき出して答えなさい。

問二 ― 部②「死んでも栗田のやつに差をつけられたくない、と思った」とありますが、そう思ったのはぼくがどのような性格だからですか。本文中から六字でぬき出して答えなさい。

問三 ― 部③「栗田のように」とありますが、「栗田」の性格を表した部分を、本文中から二十五字でぬき出して答えなさい。

問四 ― 部④「一人で食べる弁当は、なんだか、すぐくまらなかった」とありますが、どうしてぼくはまずいと感じたのですか。その理由を説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を、本文中から十四字でぬき出して答えなさい。

ぼくは、【十四字】から。

問五 ― 部⑤「苗」とありますが、これを言い換えた言葉を、本文中から一字でぬき出して答えなさい。

問六 ― 部⑥「かえって、こっちは傷ついた」とありますが、それはなぜですか。次の中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぼくが苦手としている努力と工夫ばかり求められたから。
イ おかあさんがぼくにはそれほど期待していないことがわかったから。
ウ おかあさんがおにいちやんのことしか考えていないと知ったから。
エ ぼくがおにいちやんの足を引っ張っていると自覚したから。

問七 次の文が本文中からぬけています。入るのにふさわしい部分の直後の五字を答えなさい。

「じゃあ、おにいちちゃんは、どうなのさ」

- 4 -

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

(特に指示がない場合、句読点や記号は一字に数えます)

「オリンピックを前にして、「①」はわたしにこう言ったんです。三村さん、アテネで勝てる靴をつくってね、ですよ。そんな無茶なと思いますよ。でも、その注文がわたしの靴づくりへの信頼なんです。口では、②そんな靴つくれるかと言ったものの、信頼にこたえる必要があります」

足型をつくる前の採寸には、三次元測定機を使う。これは誰にでも正確な形状を測ることができる。もうひとつの測定は、いまのところアシックスでも③三村さんにしかできない。実際に足にさわって、筋肉のつきぐあいや関節など、外見の数字では読みとれない身体的な特徴をつかむ。練習方法や練習量を知り、本人の要求も聞く。足だけではなくて体全体のバランスも見る。

「体重は左右の両足に均等にかかるのが理想ですが、六対四とか、ひどい人になると七対三という場合もあります。左右の足をくらべればすぐわかりますよ」

「それは三村さんが若いときに長距離を走った経験があるからですか」

「経験も多少はあるでしょうが、それよりなにより、何万人の運動選手の足を直接測ってきたからですよ」

三村さんは、先ほど測ったばかりだという「アラインメント測定リスト」という図表をテーブルに置いて、説明してくれる。アラインメント(alignment)は、機械の調整をするという意味合いの場合に使う。足を三次元測定機で測ったうえで、三村さん独自の触診などをして、足型をつくるための調整をする、という意味かと思う(アラインメントにはほかに照準目標、位置づけの意味もある)。

「足を見ると、この選手はこれでは膝が痛くなる、腰が痛くなる、尻が張る、体が前のめりになるとか足が流れるなどか、みんなわかります。注意をして、これこれの走り方をしたらいいと提案します。三ヵ月後にもういちど測定して数値に変化がない選手がいるんですね。④」選手のためを思うから提案したのに、なんでや、と怒りたくなります。お客さんだから、もう来るなどとは言いませんが」

足でそこまでわかるものだとは、わたしは知らなかった。

「感性でつくることが多いんです。よりよいものをつくらうとしたら、科学性を参考にするのが大事なのは言うまでもありませんが、なんぼコンピュータが進んでも、最終的な判断は人間がします。コンピュータで測定しただけでは、足首がやわらかいから着地で体がぶれるんだ、そこをなおしなさい、とは判断できないでしょう。この測定リストをじっと眺めれば、その選手の着地から蹴り出しまでの姿勢が読めるんです」

選手の走り方、癖までを観察し、汗をかきやすい体質かどうか調べて、クッション性や軽さ、通気性を勘案した靴をつくりあげるまでに、少なくとも半年はかかる。

「ものづくりに大事なのは、ことばに出して言える判断力です。靴底ひとつでも、軽くすれば摩擦

が早い、摩耗したくなくては重くなる。どんな素材の底をどうつくるかだけでも、工場とのやりとりでテストをくりかえします。最終的にはこれだと言える判断力はこちらが持たなければ、いい靴にはなりません。

野口みずきの場合は一年かかりました。最終的にはアテネに行つて、コースの路面の硬さをチェックしたり、気象条件を調べたりもしました。

そうやってあらゆるデータをそろえて、ようやく一足の靴ができるわけです」

そうなのだ。それが、あの写真の靴なのである。その靴が、四二・一九五キロを走り抜いてトップでゴールインした野口みずきの足を支えたのであった。

最後に、⑤ 三村仁司さんから若者たちにひと言なにか伝えてほしいとお願ひした。三村さんは、天を仰ぐしぐさをしてから、ことばを選びながら、つぎのように話してくれた。

「マラソンの瀬古利彦選手を育てた早稲田大学競走部の監督、中村清さんから教えられたことばがあります。「若いときに流さなかった」⑥「は、老いたのちに」⑦「になって返ってくる」とおっしゃいました。若いうちに苦勞しておけということです。いまも大事にしていることばです。

苦勞は、好きにならなければできません。誰にだってひとつぐらい⑧長所がある。自分でそれを見つけて、それで一番になれ。ネバー・ギブアップです」

これがアスリートたちのスポーツシューズづくりで日本一になった現代の名工、三村仁司さんから若者たちへのメッセージである。

(小関智弘『道具にヒミツあり』より)

問一 空らん①にあてはまる選手の名前を本文中からぬき出して答えなさい。

問二 — 部②「そんな靴」とありますが、どんな靴ですか。本文中から八字でぬき出して答えなさい。

問三 — 部③「三村さんにしかできない」とありますが、他の人にはできないのに、なぜ三村さんにならできるのですか。本文中から二十字でぬき出して答えなさい。

問四 空らん④にあてはまる文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 靴を大切に使ってくれているのがわかります。
- イ ちつとも練習していないのがわかります。
- ウ 自分自身で考えていないのがわかります。
- エ いつも身体をいたわっているのがわかります。

問五 — 部⑤「三村仁司さん」がものづくりをする上で大切にしていることは何ですか。本文中から十三字でぬき出して答えなさい。

問六 空らん⑥・⑦にあてはまる言葉を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 涙 イ 肉 ウ 血 エ 汗

問七 この文章に題名をつけるとしたらどのようなものがふさわしいですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア オリンピックでメダルを取る方法 イ 足型は正確なデータで作る
ウ 選手の注文は自分への信頼 エ たった一人での挑戦

問八 — 部⑧「長所」とありますが、あなたの長所は何ですか。また、その長所をこれからの生活にどのようにいかしていきたいと思ひますか。あなたの考えを百字程度で書いてください。

氏 名

得 点

[illegible]